

JSAAE

**NEWS
LETTER**

2003 年

No.23

3 月

Japanese Society of Alternative to Animal Experiments

日本動物実験代替法学会

目 次

1 . 会長挨拶	2
2 . 選挙管理委員会の報告	3
3 . 平成 15-16 年度役員名簿	4
4 . 大会を振り返って	6
5 . 国際大会報告・動物実験代替法の世界動向	7
6 . 財務委員会からのお願い	10
7 . 第 24 回評議員会議事録	10
8 . 2003 年度予算	13
9 . 賛助会員一覧	14
10 . 広報委員会からのお願い	14

会 長 挨 拶

日本動物実験代替法学会 会長

平成 13 年 1 月に理研の大野忠夫先生より引き継いで依頼、はや 2 年が過ぎました。この間、副会長・庶務幹事・会計幹事の 3 役をはじめとする学会役員、会員、賛助会員、事務局の皆様のご協力と支援を受けて会務を遂行して参りました。私自身は何もわからずに、うろろうしているところが多く、皆様にご迷惑をお掛けしました。この場をお借りして皆様にお詫びするとともに感謝いたします。また、図らずも、更に 2 年学会長任にあたるようにと指名を受けましたからには代替法研究の進展と学会の振興のために力を尽くしたいと思っておりますので、ご支援・ご協力を宜しくお願い申し上げます。

本学会は 1984 年に前身の研究会が設立されて以来(学会となってからは 15 年)、Russell and Burch (1954)の提唱した 3R の目的に資するための、科学と動物愛護の精神に基づいた研究の我が国における中心となってきました。また、関連する教育や情報の収集、および広報活動にも重要な働きを果たして来ました。細胞毒性試験のバリデーションの実施など大きな事業も行って来ました。この 2 年間の活動と今後の計画に関してはそれぞれの委員会より示されると思います。3 役が特に深く関わったことを振り返りますと、まず、学会の運営に大きな支援を行っていただいた特別賛助会員の方々に御挨拶したこと、麻布大学の二宮先生と長崎大学の渡邊先生にそれぞれ 2003 年及び 2004 年の大会長を引き受けていただいたこと、以前からの懸案であった学術会議への登録を果たしたこと、第 4 回国際代替法学会において日本の代替法開発の状況を報告したこと、および代替法に関する厚生科学研究班と協力し動物実験代替法を評

価するための評価委員会を ad hoc 委員会として設置し、活動の手始めとして光毒性試験代替法の評価を行ったことが上げられるかと思えます。残念ながら、学会員の漸減傾向は続いておりますし、財政基盤の確立も十分にはできませんでした。

一方、1998 年までに実験動物を用いて安全性を評価した化粧品原料および最終製品の販売を禁止するという EU 指令(Council Directive 93/35/EEC)の施行が延期されましたが、2003 年 1 月に、全身的作用に関する一部の試験を除き、動物を用いるすべての安全性試験を 2009 年以内に禁止するという法律がヨーロッパ議会及び閣僚理事会で採択されました。OECD でも代替法に関わるガイドラインが次々と作られております。このような情勢を踏まえ、1 月 27 日に開催された運営委員会で今後の方針を検討致しました。そこで基本的に合意されたことは 1) 学会を活性化するために学会の若返りを積極的に進める、2) 規約を実体に合わせて検討する、3) 代替法のバリデーションを進める、4) 学会の財政基盤を固める、及び 5) 我が国で国際代替法会議を開催する方向で検討を進めることであります。学会の若返りを計るために各種委員会の委員になるべく若手会員を入れるように致しました。また、従来評議員は全て選挙で選ばれておりますが、有望な若手を学会長推薦の評議員としてお願いできるような規約改正も考えております。また、代替法研究を促進するためには研究費の面での支援が欠かせませんが、我が国における現状は寂しい次第です。学術会議等を通じて研究費の増額を計る必要があります。また、学会の研究助成の増額も有用で

す。そのためには、まず学会の財政基盤を固める必要があります。企業や動物愛護団体に積極的に学会の趣旨と活動状況を示し、賛助を依頼する予定です。一方、国際学会開催は国際的に唯一の代替法を指向する我々の学会の活動を世界に示すという意義があります。また、学会活動の活性化や我が国における代替法への認識を高めるのに役立ちます。その実現に向け検討を進めていく予定です。これに関連して、今期では国内・国際交流委員会を改組し、国際交流委員会と広報委員会とそれぞれ独自の委員会としました。国際活動と会員を含む社会への広報活動の強化が目的です。広報委員会ではインターネットを活用し広報の活発化と効率化を計る予定です。一方、一昨年の大会は組織培養学会との共催で開催されました。他学会との共催は我々の視野を広めるとともに、動物実験代替法についての認識を広めていただく機会ともなりますので、代替法学会の identity を失わない範囲で今後とも行っていく予定です。来年度の大会は環境変異原学会との共催を予定しております。

今期も多くの先生方に学会役員、委員会委員、評議員として協力を得ることができました。これらの先生、また評議員の先生の助けを得て、学会活動の継続と活性化に向けて努力して行きたいと思っております。一般会員の方々におかれましても、大会参加、学会誌投稿、大会発表、会員のリクルート、バリデーションへの参画等のご協力をお願い申し上げます。なお、今後はインターネット環境を通じての広報活動を多くする予定ですので、これについても、会員の皆様のご協力をお願い申し上げます。

選挙管理委員会の報告

選挙管理委員会委員長 板垣 宏

日本動物実験代替法学会細則第 6 条に基づき、学会長の大野泰雄先生から、秋田正治先生（鎌倉女子大）、太田尚子先生（ポーラ化成）および私が選挙管理委員を委嘱され、平成 15-16 年度の評議員および会長・副会長選挙の実施方法について検討致しました。

選挙は、日本動物実験代替法学会会則第 9 条および同細則第 6 条・第 7 条に従って基本的に行いました。今回、特筆すべきことは、評議員選挙において従来使用してきた会員名簿を、学会事務局

より Excel file として配布することを基本としました。勿論、e-mail address を持たない会員には印刷物としての会員名簿を同封致しました。なお、この会員名簿を Excel file として配布することについては、評議員会で事前に承認を受けておりました。

開票は、11 月 6 日（水）に鎌倉女子大において、3 名の選挙管理委員の立ち会いのもとに厳正に実施致しました。

なお、有効投票数は 91 票でした。

結果は以下の通りです。

1. 会長選挙結果（敬称略）

当選：大野泰雄，次点：大野忠夫

2. 副会長選挙結果（敬称略）

当選：板垣宏，次点：黒田行昭

3. 評議員選挙結果（会員総数の約 1 / 10 として、あらかじめ 31 名前後の選出を目途として設定し開票致しました）

当選（敬称略、五十音順）

秋田正治，板垣宏，井上達，今井弘一，梅田誠，遠藤仁，大野泰雄，大野忠夫，小野宏，帯刀益夫，金子豊蔵，鎌滝哲也，黒澤努，黒田行昭，小島肇夫，小西宏明，酒井康行，阪本典子，佐藤温重，塩田浩平，杉山隆，杉山真理子，田中憲穂，難波正義，二宮博義，畑尾正人，星宏良，前島一淑，横山篤，吉村功，渡邊正巳

以上 31 名

次点者（敬称略）

小縣昭夫，青儀巧

次々点者（敬称略）

杉山雄一，松田幸久，宇佐見誠，祖父尼俊雄，土屋利江，猪股智夫

なお、選挙結果については、12月4日の評議員会および12月5日の総会で承認を受けたことをご報告致します。

以上

平成15-16年度役員名簿

会長：大野 泰雄（国立医薬品食品衛生研究所 安全性生物試験研究センター 薬理部）
副会長：板垣 宏（(株)資生堂 安全性・分析センター 安全性研究所）
評議員：吉村 功（東京理科大学工学部）
小島 肇夫（日本メナード化粧品(株) 総合研究所）
大野 泰雄（国立医薬品食品衛生研究所 安全性生物試験研究センター 薬理部）
板垣 宏（(株)資生堂 安全性・分析センター 安全性研究所）
田中 憲穂（(財)食品薬品安全センター 秦野研究所）
渡邊 正巳（長崎大学大学院医歯薬学総合研究科 放射線生物研究所）
大野 忠夫（理化学研究所細胞開発銀行内 セルメデシン(株) 理研内連絡事務所）
小野 宏（(財)食品薬品安全センター 秦野研究所）
黒澤 努（大阪大学医学部 動物実験施設）
黒田 行昭（国立遺伝学研究所）
金子 豊蔵（国際協力事業団安全性評価管理センター 日中友好プロジェクト）
秋田 正治（鎌倉女子大学）
鎌滝 哲也（北海道大学大学院薬学研究科 代謝分析学分野）
井上 達（国立医薬品食品衛生研究所 安全性生物試験研究センター）
二宮 博義（麻布大学獣医学部 実験動物学教室）
杉山 真理子（(株)資生堂 安全性・分析センター 安全性研究所）
小西 宏明（日本メナード化粧品(株) 総合研究所）
遠藤 仁（杏林大学医学部 薬理学教室）
畑尾 正一（(株)資生堂 基盤研究センター）
今井 弘一（大阪歯科大学 中央歯学研究所 組織培養実験施設）
帯刀 益夫（東北大学 加齢医学研究所 分子発生研究分野）
横山 篤（神奈川生命記念財団附属研究所 湘南研究所）
前島 一淑（慶應義塾大学医学部 実験動物センター）
杉山 隆（北里大学薬学部 臨床薬学センター 病態解析部門）
星 宏良（(株)機能性ペプチド研究所）
佐藤 温重（宇宙開発事業団）
酒井 康行（東京大学 生産技術研究所）
難波 正義（(財)岡山医学振興会）
阪本 典子（九州栄養福祉大学）

財務委員会

委員長：二宮 博義（麻布大学獣医学部 実験動物学教室）
委員：杉山 真理子（(株)資生堂 安全性・分析センター 安全性研究所）
小島 肇夫（日本メナード化粧品(株) 総合研究所）
奥村 秀信（(株)ノエビア 神戸研究所）

国際交流委員会

委員長：今井 弘一（大阪歯科大学 中央歯学研究所 組織培養実験施設）
委員：黒澤 努（大阪大学医学部 動物実験施設）
田中 憲穂（(財)食品薬品安全センター 秦野研究所）
土屋 利江（国立医薬品食品衛生研究所 療品部）
畑尾 正一（(株)資生堂(株) 基盤研究センター）

吉村 功 (東京理科大学工学部)

企画委員会

委員長：酒井 康行 (東京大学 生産技術研究所)
委員：長谷川 哲也 (城西大学薬学部 臨床薬物動態学教室)
吉山 友二 (共立薬科大学 臨床薬学講座)
鈴木 聡 (HAB 協議会附属霊長類機能研究所)
板垣 宏 ((株)資生堂 安全性・分析センター 安全性研究所)

編集委員会

委員長：黒澤 努 (大阪大学医学部 動物実験施設)
委員：今井 弘一 (大阪歯科大学 中央歯学研究所 組織培養実験施設)
大野 泰雄 (国立医薬品食品衛生研究所 安全性生物試験研究センター 薬理部)
酒井 康行 (東京大学 生産技術研究所)
田中 憲穂 ((財)食品薬品安全センター 秦野研究所)
土屋 利江 (国立医薬品食品衛生研究所 療品部)
吉村 功 (東京理科大学工学部)

規約改定委員会

委員長：佐藤 温重 (宇宙開発事業団)
委員：小野 宏 ((財)食品薬品安全センター 秦野研究所)
関澤 純 (国立医薬品食品衛生研究所)
合田 真季 (味の素(株)アミノサイエンス研究所 機能製品研究部 香粧品研究室)
渡邊 正巳 (長崎大学大学院医歯薬学総合研究科 放射線生物研究所)

バリデーション委員会

委員長：吉村 功 (東京理科大学工学部)
委員：大野 忠夫 (理化学研究所細胞開発銀行内 セルメデシン(株) 理研内連絡事務所)
大森 崇 (国立医薬品食品衛生研究所 審査センター)
小島 肇夫 (日本メナード化粧品(株) 総合研究所)

広報委員会

委員長：小島 肇夫 (日本メナード化粧品(株) 総合研究所)
委員：今井 弘一 (大阪歯科大学 中央歯学研究所 組織培養実験施設)
宇佐見 誠 (国立医薬品食品衛生研究所 安全性生物試験研究センター 薬理部)
佐々木 澄志 ((財)食品薬品安全センター 秦野研究所)
鈴木 民恵 ((株)ファンケル 中央研究所)

評価委員会

委員長：田中 憲穂 ((財)食品薬品安全センター 秦野研究所)
委員：今井 弘一 (大阪歯科大学 中央歯学研究所 組織培養実験施設)
板垣 宏 ((株)資生堂 安全性・分析センター 安全性研究所)
大野 泰雄 (国立医薬品食品衛生研究所 安全性生物試験研究センター 薬理部)
大森 崇 (国立医薬品食品衛生研究所 審査センター)
岡本 裕子 ((株)コーセー 基礎研究所)
小島 肇夫 (日本メナード化粧品(株) 総合研究所)
畑尾 正一 ((株)資生堂 基盤研究センター)
若栗 忍 ((財)食品薬品安全センター 秦野研究所)

庶務幹事：秋田 正治 (鎌倉女子大学)

会計幹事：奥村 秀信 (株)ノエビア 神戸研究所)
会計監査：岡本 裕子 (株)コーセー 基礎研究所)
夏目 秀視 (城西大学薬学部)

以上

大会を振り返って

吉村 功

何はともあれ、無事、大会が終わりました。ホッとしています。何かの行事・運営の成功を左右する三要素として、「天の時、地の利、人の和」というのがあります。今回は、「今年が国際大会開催年であった」、「私にとって都合の良い会場が確保できた」、「私の無能さを多くの方々心配して陰に陽に手助けしてくれた」、といった条件が整い、成功とまではいかないまでも、まああの形で大会を進行させていただくことができました。ご協力いただいた皆様に心から感謝しています。

速記の整理等、事務処理が終わっていないものもあって、最終的な記録をまとめるにはまだ時間がかかりますが、大会のおおよその内容は次の通りでした。

1. 参加者：一般 150 人、協賛企業等からの招待 30 人、非会員講師 11 人、事務方 8 人、合計で約 200 人という規模です。会員 300 人の学会としては、大勢の参加者に恵まれたと感じています。

2. 収入：学会補助、参加費、寄付、展示・広告料すべて含めて、300 万円と 400 万円の間、つまり当初予算 460 万円を少し下回った程度です。協賛の努力をしていただいた会員諸氏には心から感謝いたします。

3. 支出：請求がまだ出そろっておらず、テープ起し等の費用がまだ見積もれない状態ですが、予算に比べて実支出が少な目ですので、心配していた赤字状態にはならず済みそうです。支出を少な目にできたのはいくつかの要因が考えられます。思いつくままに列挙しますと、

1) 会場がコンパクトにまとまっていたので看板等を主会場の 2 枚にできたこと(看板代が結構高いのです)

2) ポスターを省略してしまったこと(ポスター作成もさりながら、郵送に意外な経費がかかります。それで大野会長には自製のポスターで宣伝をしていただくというボランティア的助力をえました)

3) 参加費のかなりを事前振り込みにしたので、受け付け要員を(有能な)2人に任せられたこと

4) メールと Fax を全面的に使用したため、通信の費用が省けたこと

5) 5 日午後の公開シンポジウムの会場費をシンポジウム事務局で負担していただいたこと(これ

が結構大きく、もし余剰金が出るとしたら、丁度この分くらいです。)

6) 参加費が高い当日受付が予想以上に多かったこと等が目につきます。これらのことが無かったら、赤字になっていたと思います。

正直なところ、11 月 15 日段階、つまり大会の 20 日前には、なんとか大会参加者が 100 人を越えて欲しい、と祈る気持ちでした。それまでの参加申し込みが 70 人程度、懇親会参加者が 16 人といった状態だったからです。そもそも事前参加と当日参加で参加費額を大きく変えているのは、事前参加数の 2,3 割り増しが総人数と予測できるからで、その伝でいえば、100 人という予測数字が出ます。それがなんと 200 人になったのですから、陰に陽に、努力して下さった方がいたためとしか思えません。無名(anonymous)の皆さんに感謝します。

事前登録の懇親会参加者が 16 人だったので、総評会館内で行う予定だった懇親会を急遽キャンセルしました。総評会館で行うと出張出前になる関係で、出前費だけで 20~30 万円かかります。これで参加者が 40 人だったら、目も当てられません。招待者の 7 割が懇親会に出るとして、総人数を 40 人と踏み、場所を探しました。幸い、目の前の会員制パブを紹介してもらうことができました。実際には、当日払い込みの方が増えて、60 人強になり、芋の子を洗うような状態になりましたが、料理や飲み物をすぐ追加できたので、食べるものが無いという悲惨なことにはなりません。狭かった分、丁度満員エレベータ内のコミュニケーションといった感じで、参加者同士の懇親になったと思います。怪我の功名です。

会員外では、サイエンティスト社の大野社長に全面的にご協力をいただきました。印刷はもちろん、看板やパネル業者の紹介、弁当の手配、特急の大量コピー、大量に必要なパネルの押しピンや追加のバッジ入れの購入先の紹介、総評会館との折衝等々。こういう雑多なことが大学の人間は苦手なのです。

反省すべきことは、準備が後手後手になって、組織委員会自体を組織できず、周りの人に顔を合わせれば、頼む、頼む、と手伝わってもらったこと

で、近くにいた方には申し訳ありませんでした。次期の大会会長には、行き届き不足に終わった今年の経験を反面の教訓としていただくために、各種の記録をお送りしました。

最後に、以下に本大会の受賞者を示します。受賞者の皆さん、おめでとうございます。以上です。

大会受賞者

ゴールドプレゼンテーション賞

ポスター P44

足利太可雄，上月裕一，穂谷昌利，板垣 宏

経皮吸収予測式の開発と化粧品原料の感作性ポテンシャルの予測への応用

論文賞

Drs. Tetsuya Watanabe, Tetsuya Hasegawa, Hidekazu Takahashi, Takuya Ishibashi, Kozo Takayama and Kenji Sugibayashi

Japanese Society of Alternatives to Animal Testing and Experimentation is pleased to present this honorable AWARD for your excellent paper on “Utility of the Three-Dimensional Cultured Human Skin Model as a Tool to Evaluate Skin Permeation of Drugs” published in AATEX, 8, 1-14, 2001.

国際大会報告 動物実験代替法の世界動向

黒澤努

第4回国際動物実験代替法会議が米国 New Orleans において開催された。本国際会議には私の他に大野泰雄会長をはじめ複数人の本会会員が座長ないし講演者として招待されていた。また本会には若手研究者の日本からの研究発表の機会を増やし、国際交流にも一役買っていたという趣旨で、国際会議への発表演題が受理された方の中から厳正な審査を行い、渡航援助を行う制度が設けられている。今回は5名の方がこの榮譽を勝ち取られ、ポスターセッションで発表された。こうしてかなり多数の動物実験代替法の研究者が出席したので、国際会議全体の様子はこれら出席した複数の方からうかがっていただくのが適当である。国際会議では単に会期中の議論だけではなく、大会外、たとえば大会終了後のイベントへの参加などを通じて国内では得られない貴重な経験を積むことができる。第16回大会ではこうした意味もあり吉村会長の計らいで、国際会議に出席された方々には特別なセッションを設けてご発表いただいた。そこで私はかならずしも総合的な国際動向ではなく一個人として感じたままをここで述べることにする。とくに大会外の経験についても多くを述べたい。

今回の国際会議では大会長である米国人道協会の Andrew Rowan 博士の努力が深く印象に残った。彼の開催した会議が成功したのは彼の功績であることは疑いない。当然こうした方は会を代表する立場にあるのだから、それを下支えする米国人道協会のスタッフの方々の苦勞も十分に感ぜられた。さらに本国際会議では Rowan 博士のご家族も全面的に協力され、3人のお子さんは会期中に参加者に渡された、T-シャツの配布、および大会バッグの配布に獅子奮迅の活躍をしていた。Rowan 博士は会期中あちこちの同時に開催されていた会場をこまめに見回っていたようで、なんとなくどこの会場にいても彼がいたような印象をもってしまった。世界各国から文化習慣の違う多数の参加者を集め、円滑にことを進めるためには相当の努力が必要であることが感じ取られた。

世界各国の実情のセッション

まず私が発表したのは初日に開催された世界各国の動物実験代替法の進展についてのセッションであった。私はチェコの Cervinka 教授とともに座長を命ぜられていた。まったく面識のない外国の方と座長と一緒にやらせていただくのは全く初めての経験であった。開催前に数回メールのやりとりはあったが、その中でさえ、各人の演説時間、途中の休憩時間の設定、質疑時間の設定などを巡って大きな意見の違いが生じた。これらを電子メールだけで調整するのはきわめて困難であった。

いよいよ大会初日がせまった。会場の案内図は提示されない、液晶プロジェクターの設定は座長自ら行わなければならないなど、セッションの運営でも相当な苦勞を強いられた。

さらに演者の中にキューバの方がおられて、折からの米国のテロ対策を考えて懸念していたら、これがあたってしまい、キューバの方の出席はできないとの事が伝えられた。ビザが米国政府から発給されなかったとのことであった。これは米国内の共同研究者の代読で解決することとなったが、代読後の質疑ではキューバの方でなければわからぬような国情についての質問などが飛び交い、代読の限界を知ってしまった。これらはいずれも国際会議ならではの難しい問題である。

さて、セッションは Cervinka 教授のセッションの背景説明と自国での展開についての発表で開始された。しかし、冒頭から大幅な時間超過となってしまった。動物実験代替法に関する研究はまだその分野だけを行っている研究者により進められているのではなく、他の分野の専門家がやっていることから、発表の趣旨などもはっきりせず、また発表形式などには様式がないため、この分野では相当時間の余裕がある運営形態が必要であることを実感した。当然事前の座長同士、各演者と座長との入念な打ち合わせは相当丁寧に行っておく必要が感ぜられた。

さて、このセッションの内容であるが、発表者は以下のようであった。

1. The background of the Meeting and My Regional Situation. Miroslav Cervinka(Chez)
2. Achievements in Raising Awareness on the Use of Alternative Methods in Latin America and the Caribbean. Gisela Murillo (Central and South America)
3. A UK Overview, and the Search for the Alternative (Wo)man. Manuel Berday(UK)
4. The European Resource Centre for Alternatives (EURCA:<http://www.eurca.org>). Jasmine de Boo (The Netherlands)

5. The Alternative Methods of Teaching Should Become Traditional. M. Makarchuk (Ukraine)
6. Online Learning Management Systems for Laboratory Technicians and Researcher. Nicole Duffee (USA)
7. The Institute for Laboratory Animal Research (ILAR) as an Information Resource on Alternatives. Joanne Zurlo (USA)
8. Activities in Japan and Asian Countries. Tsutomu Miki Kurosawa(Japan)

いずれの発表も各国の動物実験代替法への取り組みの背景説明の後に、各発表者の研究内容が発表された。とりわけ印象に残ったのは環境問題と組合わさった形で非先進国でも動物実験代替法への取り組みが開始された点であった。これらの多くは先進国からの政府海外援助の一部を用いて行われているようであった。

教育関係のハード、ソフトの開発も順調に進んでいる様子がかがえた。とくに米国実験動物学会の Duffee 博士はきわめて効果的な教育用ハード、ソフトの開発の現状を紹介されたが、わが国ではこの面に関してはさほどの進展がみられない状況であり、本会が主導してこうした開発を行う必要があることを痛感した。

教育のセッション

続いて初等中等教育における各国の取り組みのセッションに参加した。私は本会の大会で過去に行われた市民フォーラムの各演者の発表内容について解説し、わが国でも初等中等教育における動物実験代替法に関する関心が高まっている実情を示した。

各国ともに代替法を教育に取り入れる取り組みが試みられていた。とくに北欧ではすでに代替法を教育に取り入れた場合とこれまでの動物実験による授業の間で学生の修得度を比較する試みが行われているとの報告があった。この中では2群に分けて学生に代替法と動物実験を別々に履修させ、試験の結果で学習度を比較していた。それによれば代替法では一時的な記憶に残るような知識は動物実験以上に学習できたが、長い時間を経ての理解では動物実験の方が良い成績を示すことが紹介された。今後は教育の中にも代替法の普及が望まれるが、わが国の現状ではまず教師に動物実験代替法が存在することをどのように教育するかが大きな課題と思われた。

これとは別に私が Koken ラットなどのシミュレータについて若干ふれたところ、会場から大きな反応があり、こうしたシミュレータの存在は知りながら、わが国の前島教授を中心としたグループで作成されたことを知らない方が大勢いることがわかった。なかにはシミュレータに関する講演はしないのかという質問まで飛び出し、各国の関心の高さを伺わせた。次回の国際会議では、是非前島教授に Koken シリーズの講演ないしはデモンストレーションを本会から依頼してやっていただくことが必要であろうと思われた。

機器の展示

残念ながらわが国からの代替法機器、ソフトの展示はなかったが、元米国人道協会の Balcomb 博士の努力により各国からの展示があった。シミュレータに関しては英国を中心として EuroNICHE から獣医学教育における動物実験代替法用の機器が多く展示されていた。これらは Koken シリーズと同様の趣旨で開発されていた。品質には今後の開発に期待したい点多かったが、きわめて多様な機器を開発していて、これらは海外へも貸し出す事業を展開していた。さらにこのグループはソフトの開発も熱心でわが国でもなじみが深いデモンストレーションビデオの紹介もあった。さらに新しいモルモットの教科書をまもなく出版するとして、パンフレットの配布を行っていた。

英国と北欧のグループは血管縫合の実習に使われる人工血管を開発していて、マイクロサージエリーの分野では実用的なものとなりつつあったが、これをさらにラットの生体模型の中に組み込み、動物実験代替法機器として展示していた。きわめて完成度の高い製品で今後の普及が期待された。

動物実験代替法では研究計画策定の段階で入念な文献検索を行い、すでに行われた動物実験を繰り返さないことによる Reduction を計るという戦略がとられている。これまでは実際問題としてどのような方法で文献検索を行うと十分な検索とされるかが各国で議論されていたが、欧州の

複数の団体から文献検索の新しいソフトが発表されていた。そのひとつは多数の文献データベースを串刺し検索する仕掛けで、実際には使用料が有料であるデータベースに対して臨時のIDを発行させて、検索のデモを行っていた。しかし、実際に使うときは有料データベースのアクセスが必要となり、その経費を誰が支払うべきか考えさせられた。ただでさえ忙しい研究者に、さらにきわめて限られた研究費をやりくりしているわが国の現状では、とうてい実用とはならぬのではないかと懸念された。

これ以外にも多数のビデオテープおよびコンピュータソフトに図版あるいは動画を組み合わせた教育用機器が展示されていた。一度電子的にソフトが完成し、インターネットに乗って配布されると、ごくささやかな改良が積み重なり、開発速度は加速することが知られている。本会でもこうした電子媒体の情報を入手して関心のある団体に配布するなどの活動が今後期待された。

発表を行わなかったテーマについて

発表を行わなかった種々のセッションにおける世界の動向に若干ふれる。わが国が得意とする培養細胞を用いる動物実験代替法の発表が相次いだ。とくに ECVAM とドイツのグループは実用的な代替法の開発を終え、欧州内ではすでに認知された方法について発表を行っていた。こうした方法は国際的に認知されて実用化するところまでできたことが実感された。しかし、これらの開発には豊富な資金を欧州がつけ込んだが、予定よりも相当遅れて開発された印象を持った。これまで手がけられた代替法の開発は動物実験の中でもきわめて限定的な安全性試験についてのものであり、多数の安全性試験の項目の中のごく一部でしかない。動物実験代替法を動物実験全般にわたって開発することを想定すると、よほどの研究資金と相当な期間が必要なことが徐々に明らかされたように思われた。

バイオメディカルサイエンスは米国で著しく発展している。とくに米国政府が提供するこの分野の研究費だけでもここ数年の伸びは著しいとされている。その米国で開催される国際会議であるから実験動物学の分野の方の参加も期待された。しかし、実際には米国実験動物学会の幹部はほとんど出席していなかった。またバイオメディカルサイエンスの主要な企業の参加も顕著には見えなかった。せっかく米国で開催された国際会議で米国の学会、企業などの参加が少ないことの背景を推察したくなる。主催団体が米国人道協会であったことが影響しているのかもしれない。実際関連集会として開催された動物権利関係の会議では米国でももっとも強硬とされる PETA のメンバーが参加していた。その他の動物実験反対運動団体の参加については知らないが、多くの動物実験反対運動団体は動物実験代替法の開発を求めている。こうしてみると本会においても動物実験代替法を科学的に研究する立場としては動物実験絶対反対の団体との関係を整理しておく必要に迫られているのかもしれない。とくに非合法的な活動を行う動物実験反対運動グループ、一部の動物愛護団体の非合法活動を容認するような行動もみられる。本会の健全な発展のために、こうした団体との関係についてよく考える必要があるものと思われた。

パーティー

国際会議での情報収集は講演時間内だけに限定されるものではない。特に動物実験代替法のように新しく、方法論等も定まっておらず、かつきわめて多様な分野からの参入があるテーマでは、講演時間以外での情報交換はきわめて重要である。こうした情報交換はパーティーの席で行われるのが普通である。今回もパーティーの席で実に多くの交流があった。私もできるだけ多数の人々と知り合いとなり、動物実験代替法の研究内容を伺うことに専念した。とくに国内・国際交流委員長を命ぜられていることから、積極的に各国の活動的な人物に話かけ、知り合いとなるだけでなく求めに応じて本会会員に紹介を繰り返した。ただし期待の若手研究者ではあったが一部に積極性に欠け、こうした交流の場でも本会会員だけで固まって国際交流に積極的でない方がみられたのは若干の懸念であった。

閉会昼食会

最終日の閉会昼食会が企画されていたが、その昼食会にて短い演説を依頼された。さしたる準備もせず、わが国の現状、本会の活動、そして国際的な動物実験代替法の発展への期待くらいを述べるだけでお茶を濁す覚悟でいた。ところが指名された他の3名の方々はいずれも過去の著名

な名文句などを引用し、きわめて格調高い演説をされた。準備のなかった私の演説はまったく見る影もなく、国内・国際交流委員長としては本会の体面にいささかの泥を塗ってしまったのではないかと深く恥じ入った次第である。今後は本会からはより適切な方にこうした演説を任せるべきであろうと深く反省した。

なお、本稿は2002年12月5日に第16回日本動物実験代替法学会、フォーラム“動物実験代替法の国際動向”「押し寄せてくる外国の圧力」のセッションで“動物実験代替法の世界動向”として発表した内容である。

国際大会 報告動物実験代替法の世界動向

黒澤努

第4回国際動物実験代替法会議が米国 New Orleans において開催された。本国際会議には私の他に大野泰雄会長をはじめ複数人の本会会員が座長ないし講演者として招待されていた。また本会には若手研究者の日本からの研究発表の機会を増やし、国際交流にも一役買っていただくという趣旨で、国際会議への発表演題が受理された方の中から厳正な審査を行い、渡航援助を行う制度が設けられている。今回は5名の方がこの荣誉を勝ち取られ、ポスターセッションで発表された。こうしてかなり多数の動物実験代替法の研究者が出席したので、国際会議全体の様子はこれら出席した複数の方からうかがっていただくのが適当である。国際会議では単に会期中の議論だけではなく、大会外、たとえば大会終了後のイベントへの参加などを通じて国内では得られない貴重な経験を積むことができる。第16回大会ではこうした意味もあり吉村会長の計らいで、国際会議に出席された方々には特別なセッションを設けてご発表いただいた。そこで私はかならずしも総合的な国際動向ではなく一個人として感じたままをここで述べることにする。とくに大会外の経験についても多くを述べたい。

今回の国際会議では大会長である米国人道協会の Andrew Rowan 博士の努力が深く印象に残った。彼の開催した会議が成功したのは彼の功績であることは疑いない。当然こうした方は会を代表する立場にあるのだから、それを下支えする米国人道協会のスタッフの方々の苦勞も十分に感ぜられた。さらに本国際会議では Rowan 博士のご家族も全面的に協力され、3人のお子さんは会期中に参加者に渡された、T-シャツの配布、および大会バッグの配布に獅子奮迅の活躍をしていた。Rowan 博士は会期中あちこちの同時に開催されていた会場をこまめに見回っていたようで、なんとなくどこの会場にいても彼がいたような印象をもってしまった。

世界各国から文化習慣の違う多数の参加者を集め、円滑にことを進めるためには相当の努力が必要であることが感じ取られた。

世界各国の実情のセッション

まず私が発表したのは初日に開催された世界各国の動物実験代替法の進展についてのセッションであった。私はチェコの Cervinka 教授とともに座長を命ぜられていた。まったく面識のない外国の方と座長を一緒にやらせていただくのは全く初めての経験であった。開催前に数回メールのやりとりはあったが、その中でさえ、各人の演説時間、途中の休憩時間の設定、質疑時間の設定などを巡って大きな意見の違いが生じた。これらを電子メールだけで調整するのはきわめて困難であった。いよいよ大会初日がせまった。会場の案内図は提示されない、液晶プロジェクターの設定は座長自ら行わなければならないなど、セッションの運営でも相当な苦勞を強いられた。

さらに演者の中にキューバの方がおられて、折からの米国のテロ対策を考えて懸念していたら、これがあたってしまい、キューバの方の出席はできないとの事が伝えられた。ビザが米国政府から発給されなかったとのことであった。これは米国内の共同研究者の代読で解決することとなったが、代読後の質疑ではキューバの方でなければわからぬような国情についての質問などが飛び交い、代読の限界を知ってしまった。これらはいずれも国際会議ならではの難しい問題である。

さて、セッションは Cervinka 教授のセッションの背景説明と自国での展開についての発表で開始された。しかし、冒頭から大幅な時間超過となってしまった。動物実験代替法に関する研究はまだその分野だけを行っている研究者により進められているのではなく、他の分野の専門家が行っていることから、発表の趣旨などもはっきりせず、また発表形式などには様式がないため、この分野で

は相当時間の余裕がある運営形態が必要であることを実感した。当然事前の座長同士、各演者と座長との入念な打ち合わせは相当丁寧に行っておく必要が感ぜられた。

さて、このセッションの内容であるが、発表者は以下のものであった。

•The background of the meeting and my regional situation.

Miroslav Cervinka(Chez)•Achievements in Raising Awareness on the Use of Alternative Methods in Latin America and the Caribbean Gisela Murillo (Central and South America)

•A UK Overview, and the Search for the Alternative (Wo)man

Manuel Berday(UK)

•The European Resource Centre for Alternatives (EURCA:<http://www.eurca.org>)

Jasmine de Boo (The Netherlands)

•The Alternative Methods of Teaching Should Become Traditional M. Makarchuk (Ukraine)•Online Learning Management Systems For Laboratory Technicians And

Researcher Nicole Duffee (USA)

•The Institute for Laboratory Animal Research (ILAR) as an Information Resource on Alternatives Joanne Zurlo (USA)

•Activities in Japan and Asian countries Tsutomu Miki Kurosawa(Japan)

いずれの発表も各国の動物実験代替法への取り組みの背景説明の後に、各発表者の研究内容が発表された。とりわけ印象に残ったのは環境問題と組合わさった形で非先進国でも動物実験代替法への取り組みが開始された点であった。これらの多くは先進国からの政府海外援助の一部を用いて行われているようであった。

教育関係のハード、ソフトの開発も順調に進んでいる様子がうかがえた。とくに米国実験動物学会のDuffee博士はきわめて効果的な教育用ハード、ソフトの開発の現状を紹介されたが、わが国ではこの面に関してはさほどの進展がみられない状況であり本会が主導してこうした開発を行う必要があることを痛感した。

教育のセッション

続いて初等中等教育における各国の取り組みのセッションに参加した。私は本会の大会で過去に行われた市民フォーラムの各演者の発表内容について解説し、わが国でも初等中等教育における動物実験代替法に関する関心が高まっている実情を示した。

各国ともに代替法を教育に取り入れる取り組みが試みられていた。とくに北欧ではすでに代替法を教育に取り入れた場合とこれまでの動物実験に

よる授業の間で学生の修得度を比較する試みが行われているとの報告があった。この中では2群に分けて学生に代替法と動物実験を別々に履修させ、試験の結果で学習度を比較していた。それによれば代替法では一時的な記憶に残るような知識は動物実験以上に学習できたが、長い時間を経ての理解では動物実験の方が良い成績を示すことが紹介された。今後は教育の中にも代替法の普及が望まれるが、わが国の現状ではまず教師に動物実験代替法が存在することをどのように教育するかが大きな課題と思われた。

これとは別に私が Koken ラットなどのシミュレータについて若干ふれたところ、会場から大きな反応があり、こうしたシミュレータの存在は知りながら、わが国の前島教授を中心としたグループで作成されたことを知らない方が大勢いることがわかった。なかにはシミュレータに関する講演はしないのかという質問まで飛び出し、各国の関心の高さを伺わせた。次回の国際会議では是非前島教授に Koken シリーズの講演ないしはデモンストレーションを本会から依頼してやっていただくことが必要であろうと思われた

機器の展示

残念ながらわが国からの代替法機器、ソフトの展示はなかったが、元米国人道協会の Balcomb 博士の努力により各国からの展示があった。シミュレータに関しては英国を中心として EuroNICHE から獣医学教育における動物実験代替法用の機器が多く展示されていた。これらは Koken シリーズと同様の趣旨で開発されていた。品質には今後の開発に期待したい点も多かったが、きわめて多様な機器を開発していて、これらは海外へも貸し出す事業を展開していた。さらにこのグループはソフトの開発も熱心でわが国でもなじみが深いデモンストレーションビデオの紹介もあった。さらに新しいモルモットの教科書をまもなく出版するとして、パンフレットの配布を行っていた。

英国と北欧のグループは血管縫合の実習に使われる人工血管を開発していて、マイクロサージェリーの分野では実用的なものとなりつつあったが、これをさらにラットの生体模型の中に組み込み、動物実験代替法機器として展示していた。きわめて完成度の高い製品で今後の普及が期待された。

動物実験代替法では研究計画策定の段階で入念な文献検索を行い、すでに行われた動物実験を繰り返さないことによる Reduction を計るという戦略がとられている。これまでは実際問題としてどのような方法で文献検索を行うと十分な検索とされるかが各国で議論されていたが、欧州の複数の団体から文献検索の新しいソフトが発表されていた。そのひとつは多数の文献データベースを串刺し検索する仕掛けで、実際には使用料が有料であるデータベースに対して臨時的 ID を発行させて、検索のデモを行っていた。しかし、実際に使うと

きは有料データベースのアクセスが必要となり、その経費を誰が支払うべきか考えさせられた。ただでさえ忙しい研究者に、さらにきわめて限られた研究費をやりくりしているわが国の現状では、とうてい実用とはならぬのではないかと懸念された。

これ以外にも多数のビデオテープおよびコンピュータソフトに図版あるいは動画を組み合わせた教育用機器が展示されていた。一度電子的にソフトが完成し、インターネットに乗って配布されると、ごくささやかな改良が積み重なり、開発速度は加速することが知られている。本会でもこうした電子媒体の情報を入手して関心のある団体に配布するなどの活動が今後期待された。

発表を行わなかったテーマについて

発表を行わなかった種々のセッションにおける世界の動向に若干ふれる。わが国が得意とする培養細胞を用いる動物実験代替法の発表が相次いだ。とくに ECVAM とドイツのグループは実用的な代替法の開発を終え、欧州内ではすでに認知された方法について発表を行っていた。こうした方法は国際的に認知されて実用化するところまでできたことが実感された。しかし、これらの開発には豊富な資金を欧州がつぎ込んだが、予定よりも相当遅れて開発された印象を持った。これまで手がけられた代替法の開発は動物実験の中でもきわめて限定的な安全性試験についてのものであり、多数の安全性試験の項目の中のごく一部でしかない。動物実験代替法を動物実験全般にわたって開発することを想定すると、よほどの研究資金と相当な期間が必要なことが徐々に明らかされたように思われた。

バイオメディカルサイエンスは米国で著しく発展している。とくに米国政府が提供するこの分野の研究費だけでもここ数年の伸びは著しいとされている。その米国で開催される国際会議であるから実験動物学の分野の方の参加も期待された。しかし、実際には米国実験動物学会の幹部はほとんど出席していなかった。またバイオメディカルサイエンスの主要な企業の参加も顕著には見えなかった。せっかく米国で開催された国際会議で米国の学会、企業などの参加が少ないことの背景を推察したくなる。主催団体が米国人道協会であったことが影響しているのかもしれない。実際関連集会として開催された動物権利関係の会議では米国でももっとも強硬とされる PETA のメンバーが参加していた。その他の動物実験反対運動団体の参加については知らないが、多くの動物実験反対運動団体は動物実験代替法の開発を求めている。こうしてみると本会においても動物実験代替法を科学的に研究する立場としては動物実験絶対反対の団体との関係を整理しておく必要に迫られているのかもしれない。とくに非合法的な活動を行う動物実験反対運動グループ、一部の動物愛護団体の非

合法活動を容認するような行動もみられる。本会の健全な発展のために、こうした団体との関係についてよく考える必要があるものと思われた。

パーティー

国際会議での情報収集は講演時間内だけに限定されるものではない。特に動物実験代替法のように新しく、方法論等も定まっておらず、かつきわめて多様な分野からの参加があるテーマでは、講演時間以外での情報交換はきわめて重要である。こうした情報交換はパーティーの席で行われるのが普通である。今回もパーティーの席で実に多くの交流があった。私もできるだけ多数の人々と知り合いとなり、動物実験代替法の研究内容を伺うことに専念した。とくに国内国際交流委員長を命ぜられていることから、積極的に各国の活動的な人物に話かけ、知り合いとなるだけでなく求めに応じて本会会員に紹介を繰り返した。ただし期待の若手研究者ではあったが一部に積極性に欠け、こうした交流の場でも本会会員だけで固まって国際交流に積極的でない方がみられたのは若干の懸念であった。

閉会昼食会

最終日の閉会昼食会が企画されていたが、その昼食会にて短い演説を依頼された。さしたる準備もせずわが国の現状、本会の活動、そして国際的な動物実験代替法の発展への期待くらいを述べるだけでお茶を濁す覚悟でいた。ところが指名された他の3名の方々はいずれも過去の著名な名文句などを引用し、きわめて格調高い演説をされた。準備のなかった私の演説はまったく見る影もなく、国内国際交流委員長としては本会の体面にいささかの泥を塗ってしまったのではないかと深く恥じ入った次第である。今後は本会からはより適切な方にこうした演説を任せるべきであろうと深く反省した。

なお、本稿は2002年12月5日に第16回日本動物実験代替法学会、フォーラム「動物実験代替法の国際動向」「押し寄せてくる外国の圧力」のセッションで「動物実験代替法の世界動向」として発表した内容である。

財務委員会からのお願い

特別賛助会員・一般賛助会員・法人会員を増やしましょう！

平成 15 年 1 月 27 日に開催された運営委員会で、下記の方々が財務委員会のメンバーとして承認されました。委員全員が日本動物実験代替法学会（以下学会）の発展のために努力する覚悟を決めた次第です。

さて、当学会の財務の概況（2003 年度予算）を見ますと、下記のごとくです。

会員数：300 余名、年会費収入：162 万円、賛助
会費収入：390 万円、雑収入：4 万円、繰越金：
450 万円、総予算：約 1000 万円。

この予算の約 70%（繰越金をのぞく）を賛助
会員からの会費に依存し、学会の運営が行われ
ております。支出を見ますと、決して豊かでな
い財政、多くの支出項目のなかで、研究助成や
論文賞に 110 万円（総予算の約 11%）を計上し、
動物実験代替法の研究開発や若手研究者の育成
に力が注がれております。また、種々のバリデ
ーションプロジェクトおよび光毒性試験代替法の評
価試験等が実施され、学会予算の一部が計上さ
れております。こうした状況は当学会の最大
の特徴であり誇るべきことであります。財務委員
会としましてはこの体制を今後とも維持し発展
させることが大切と考えております。当学会が

社会の要請に即した活動をさらに活発化する為
には、今の財政状況を改善し予算規模を拡大す
る必要があります。

そこで、会員の皆様にお願ひがあります。ご
所属の企業、研究所、団体等の担当部署に当学
会の特別賛助会員、一般賛助会員、法人会員の
いずれかに加入するよう勧誘していただけない
でしょうか。

「動物実験代替法の開発研究」や「適正な動物
実験」は、当学会の理念でもあり、社会の要請に
応えようとする姿勢でもあります。こうした学会
に賛助することにより、ご所属の組織のイメージ
アップ、ニュースレターへの広告掲載が無料（法
人会員のみ）です。是非こうした点も強調して
勧誘していただければと考えております。現在
の賛助・法人会員は 14 頁に示してあります。ま
た、会費は次の様になっております。特別賛
助会員（一口 50 万円）、一般賛助会員（一口
5 万円）、法人会員（一口 5 万円、二口以上）。

詳細につきましては、下記の財務委員にお問
い合わせください。会員皆様のご理解とご協
力を切に願う次第です。

財務委員会委員(2003 2004 年度)

委員長：二宮博義(麻布大学, tel: 0427-69-1652, e-mail: ninomiya@azabu-u.ac.jp)

委員：奥村秀信(ノエビア, tel: 0748-23-1477, e-mail: n84509@noevir.co.jp)

小島 肇夫(日本メナード, tel: 052-531-6269, e-mail: h.kojima@menard.co.jp)

杉山真理子(資生堂, tel: 045-590-6062, e-mail: mariko.sugiyama@to.shiseido.co.jp)

第 24 回評議員会議事録

日時：平成 14 年 12 月 4 日 12 時～13 時 20 分

会場：総評会館 205 会議室

参加者：大野泰雄，板垣宏，秋田正治，大野忠夫，小野宏，黒澤努，黒田行昭，小島肇夫，酒井康行，佐藤温重，杉山隆，杉山真理子，田中憲穂，二宮博義，畑尾正人，星宏良，吉村功，渡邊正巳
委任状提出者：配布資料

- 1) 平成 14 年度評議員会の議事次第（案）
- 2) 平成 14 年度総会の議事次第（案）
- 3) バリデー委員会報告書
（含む日本動物実験代替法学会バリデー
ン委員会議事録）
- 4) 規約検討特別委員会報告書（含む第 24 回評議
委員会規約検討特別委員会報告（案））
- 5) 国内・国際交流委員会報告書（案）
- 6) 企画委員会報告書
- 7) 編集委員会報告資料
- 8) 代替法評価委員会報告書
- 9) 日本動物実験代替法学会論文賞選考結果報告
書
- 10) 日本学術会議登録に関する報告資料
- 11) 平成 15-16 年度学会役員・評議員選挙結果に
関する報告資料
- 12) 2001 年度日本動物実験代替法学会決算報告に
関する資料
- 13) 2002 年度会計中間報告書
- 14) 2003 年度予算（案）

議事

1) 開会

大野泰雄会長より開会の宣せられたのち，評議員総数 31 名の内，18 名が参加し，欠席者 13 名から委任状が届いていることが庶務幹事代行の板垣副会長から報告され，評議員会が成立していることが確認された．また，参加者はすべて現評議員でかつ平成 15 16 年度の評議員候補者であることから，新旧評議員会を分離せずに会を運営するとされた．

2) 大野会長より開会の挨拶が行われた．

3) 報告事項

3-1) 各種委員会報告

財務委員会

田中委員長より，現在，会員が 301 名，特別賛助会員 3，一般賛助会員 9，法人会員 2 で賛助金総額が 405 万円であること，および昨年同期の会員数は 309 名で若干減少していることが報告された．

バリデー委員会

大野忠夫委員長より注射剤の筋肉刺激性試験代替法については，昨今，筋肉注射が行われなくなったことから，中止とした．その代わりに静脈内投与薬の投与部位刺激性試験についてバリデー
ションを実施する予定である．ヒト血管内皮細胞株を入手してから実行する予定．バリデー
ション実

施の公表は 2003 年，開始は 2004 年の予定．プロ
トコールは来年までに加藤氏（塩野義製薬）が作
成すると報告された．代替法評価委員会の関連で
光毒性試験代替法のバリデー
ションを実行する
ためには，2 つのバリデー
ションを同時に進行できる
ような体制構築が必要であり，かなりの覚悟が必要とされた．

規約検討特別委員会

佐藤委員長より学会細則第 8 章第 18 条に規定された顕彰規定についての内規案に関して，第 22 回評議員会で協議が行われたが，承認手続きに不備があったことから再提案すること，および現細則の不備な点について改定案を作成中であることが報告された．

国内・国際交流委員会

黒澤委員長より報告書の修正がなされた後，国際代替法会議に 5 名の渡航援助を行ったこと，および同学会長より講演依頼のあった者に対して 10 万円の補助を行ったことが報告された．また，学会のホームページ(<http://jsaae.jp/>)と評議員会の ML (hyougi@jssae.jp)を立ち上げたこと，その他の活動について報告された．なお，次の国際代替法会議は 3 年後に Dr Spielmann がベルリンで，次回はスペインで 6 年後に開催されることが報告された．

編集委員会

吉村委員長より，AATEX Vol. 8 の進行状況，Vol. 9 の発行予定および編集上の要改善点が報告された．大きな問題は投稿論文数が少ないこと，またそのため，受理から本としてまとまるまでに時間を要していることが報告された．

企画委員会

金子委員長が欠席であったため，大野泰雄会長が代わりに報告した．研究助成の申請は 3 件あり，その上位 2 件が同点であったこと，また，それらの合計申請金額が 152 万円であったことから，会長に 2 件支給することが可能か否かの検討依頼があった．副会長および会計幹事と相談し，承認されたことから，共立薬科大学の吉山先生，および秦野研究所の津田先生に助成金を支給することにされたことが報告された．また，論文賞選考委員候補者を選定し，大野泰雄会長に承認を受けたことが報告された．

代替法評価委員会

金子委員長が欠席のため，田中副委員長より光毒性試験代替法の評価状況について報告された．評価の申請はまだ無いが，近い内に 1 件申請される予定とされた．

3-2) 特別委員会として広報委員会の設置について

大野泰雄会長より，国内・国際交流委員会が多忙なため，特別委員会として，広報委員会を設置し，国内関係の業務(news letter, home page, および Mail list 管理)を担当することとしたい旨の提案がなされ，評議員会で承認された．また，委

員会の変更に伴う事務的な変更については、評議員会として承認することが決定された。

3-3) その他の報告事項

論文賞選考経過報告

大野泰雄選考委員長より選考経緯と選考結果（城西大学・渡邊らの論文 "Utility of the three-dimensional cultured human skin model as a tool to evaluate skin permeation of drugs. AATEX 8(1) 1-14, 2001）が報告された。

学会会議登録の報告

大野泰雄会長より、学会会議に登録したことが報告された。研究連絡委員会は第4部の細胞生物学(408)、第6部の獣医学(618)、第4部の動物科学(405)の順で希望を出したが、連絡員の登録に関してはまだ連絡が来ていない旨報告された。

4) 審議事項

4-1) 選挙管理委員会

板垣選挙管理委員会委員長より会長、副会長、評議員選挙の結果が報告された。会長は大野泰雄現会長、副会長は板垣宏現副会長が再選された。評議員当選者は吉村功、小島肇夫、大野泰雄、板垣宏、田中憲穂、渡邊正巳、大野忠夫、小野宏、黒澤努、黒田行昭、金子豊蔵、秋田正治、鎌滝哲也、井上達、二宮博義、杉山真理子、小西宏明、遠藤仁、畑尾正人、今井弘一、帯刀益夫、横山篤、前島一淑、塩田浩平、杉山隆、星宏良、佐藤温重、酒井康行、梅田誠、難波正義、阪本典子の31名であることが報告され、了承された。また、塩田浩平氏および梅田誠氏より辞退の連絡を受けたことから、次点者を繰り上げるか否か検討され、今回は繰り上げないこととされた。

4-2) 規約改正について

佐藤委員長より学会細則第8章第18条に規定された顕彰規定についての内規案（日本動物実験代替法学会の表彰に関する規定、日本動物実験代替法学会賞受賞内規、日本動物実験代替法学会論文賞受賞内規）が示され、承認された。また、広報委員会の設置に伴い、国内・国際交流委員会を国際交流委員会と変更することが承認された。

4-3) 2001年度（平成13年度）会計報告

小島会計幹事より会計監査報告書（桑形、奥村）について報告され、承認された。

4-4) 2002年度（平成14年度）会計中間報告

小島会計幹事より中間報告について報告された。なお、年会費納入者が現時点で189名と少なく、再度督促する予定であることが報告された。

4-5) 2003年度（平成15年度）予算案

小島会計幹事より予算案について報告された。なお、編集関連費用200万円の内には学会誌発行

費用150万円、ニュースレター編集関連費用30万円、編集事務費用20万円が含まれることが説明され、また、広報委員会の費用として5万円が追加されると案が修正され、承認された。なお、国際会議用の基金10,047,640円の使途について審議され、会議開催の可否を含めて、次回の運営委員会で更に審議することとされた。

4-6) 次次期大会長選考について

大野会長より長崎大学・渡邊教授が推薦され、日本環境変異原学会と合同で学会を開催すること、およびそれにより学会の幅が広がることを期待していることが説明され、了承された。

5) 平成15年度評議員会

5-1) 平成15-16年度運営委員について

大野会長より、以下に示された次期運営委員案について、説明され、了承された。また、各委員長はそれぞれの委員会に所属する委員の選考に関し、現委員会に所属するものを1名は入るようにすること、およびなるべく若い正会員の登用を希望することを依頼された。

役員

会長：大野泰雄

副会長：板垣 宏

運営委員：

庶務幹事：秋田正治

会計幹事：奥村秀信

会計監事：岡本裕子、夏目秀視

常設委員会委員長

企画委員会：酒井康行

財務委員会：二宮博義

編集委員会：黒澤 努

国際交流委員会：今井弘一

バリデーション委員会：吉村 功

特別委員会委員長

評価委員会：田中憲穂

規約検討特別委員会：佐藤温重

広報委員会：小島肇夫

6) 次期大会の案内

二宮博義・麻布大学教授より、来年度の大会の計画が説明され、評議員へ協力依頼がなされた。

現時点では2003年11月に麻布大学(相模原市)で開催する方向で検討中とのこと。

7) 次次期大会長の挨拶

渡邊正巳教授より挨拶がなされた。

8) その他

大野会長より、来年の1月に運営委員会を開催したいとの意向が示された。

以上

現評議員：金子豊蔵、鎌滝哲也、井上達、遠藤仁、今井弘一、帯刀益夫、横山篤、前島一淑、塩田浩平、難波正義、杉山雄一、栗下昭弘、小縣昭夫
次期（平成15-16年度）評議員候補者：小西宏明、梅田誠、阪本典子

賛助会員一覧

特別賛助会員

日本化粧品工業連合会
(財)体質研究会
三基商事株式会社

一般賛助会員

秋田住友ペーク株式会社
株式会社杏林製薬
株式会社コーセー研究所
塩野義製薬株式会社
田辺製薬株式会社
株式会社日水製薬
日本たばこ産業株式会社
JAVA

法人会員

日本メナード化粧品株式会社
株式会社和光純薬工業

広報委員会からのお願い

広報委員長 小島 肇夫

本年より新設されました広報委員長を担当いたします日本メナード化粧品株式会社 総合研究所の小島 肇夫(はじめ)です。広報委員会メンバーの詳細な紹介は、次号でさせていただきます。楽しみにお待ちしております。

広報委員会は皆様に学会活動を幅広く理解していただくため、ニュースレターやホームページの充実に向けて努めていく所存です。ニュースレターやホームページに対する意見やクレームなど何でも小島までお寄せ下さい。

お気づきのように、ニュースレターは今号よりサイズをA4版に変更しました。前任者の

金子先生(元・国立医薬品食品衛生研究所)の方式を極力継承しようとしたのですが、ページ数が多くなったこともあり、1ページを2段にしました。慣れない編集作業であることをご考慮いただき、お見苦しい点がございましたらご容赦下さい。年に4回の発行を通して、皆様と学会の距離を縮めていきたいと考え、新鮮で豊富な情報を提供するつもりです。有用にご利用戴ければ幸いです。

また、現在、広報委員の先生方とホームページ内容の刷新を検討中です。この春には新しいホームページに触れていただけるととも

に、2 ヶ月に一度は必ず内容を更新する予定です。何度もアクセスいただけますようお願い致します。

ところで、ニュースレター向けの原稿を募

集しています。今後、会員の活動状況や声も拾っていきたいと考えておりますので、原稿をどしどしお寄せ下さい。どのような形でも結構です。お待ちしております。

日本動物実験代替法学会事務局
東京都文京区本郷 7-2-4 浅井ビル 501 号室 学会事務局
TEL:03-3811-3666 FAX:03-3811-0676
E-mail : JDM05126@nifty.ne.jp

発行：日本動物実験代替法学会
会長：大野 泰雄
担当：広報委員会 委員長 小島 肇夫
日本メナード化粧品株式会社 総合研究所
〒451-0071 名古屋市西区鳥見町 2-7
TEL:052-531-6269 FAX:052-531-6277
E-mail:h.kojima@menard.co.jp